

# 文法に関する言語転移基礎研究

—Weinreich の *Languages in Contact* における文法転移研究を中心として—

## A Preliminary Study of Language Transfer:

An Overview of Grammatical Language Transfer with focus on *Languages in Contact* by Weinreich

key words: language transfer, language contact, bilingualism

米 田 佐 紀 子

### 序章

本論がテーマとする「文法」は、いわゆる統語及び形態論に関わる分野の事である。この分野は言語転移においても言語教育においても、第二言語に見られるいわゆる「母語からの逸脱」という形で多く取り上げられている分野である。統語や形態に見られる規範からの逸脱はどのように、そしてなぜ起こるのだろうか。このメカニズムを探る事は言語の普遍性を探る上でも、また、言語教育においても重要な課題である。

本論では、言語転移研究の始祖とも言える Uriel Weinreich による *Languages in Contact* (1966) が現在においてもバイブル的存在であることから、これを出発点として、文法の分野で見られる言語転移の現象のメカニズムを最近の研究も取り入れつつ探っていく。なお、Weinreich は「干渉」という言葉を使っているが、近年、応用言語学/英語教育の分野においては、「転移(language transfer)」が使用されており、Weinreich の意味する「干渉」は「転移」に含まれるものなので、ここでは主に「転移」と言う語を使用する。

### 第1章 分析基準の明確化

文法的な影響が接触する言語間で見られるのか見られないのか、見られるとしたらどのようなものなのか、という問題は言語転移の中心的課題である。Weinreich が扱っている Meillet や Sapir は言語間の相互的影響は全くないといい、Schuchardt は際限がないほど様々な影響が出ると言い、両者は全く異なる見解を示している (Weinreich 1966: 29)。ここから、この文法転移という中心的課題に取り組むために、Weinreich はまず、分析するための基準作りが大切だとし、基礎的な術語や概念に対する基準を次のように述べている：まず、一つ目の区別は、発話の区分、分節、単純形態素を区別する韻律的な特徴を含めた形態素を文法的関係と区別することである。しかし、オドリン (1995: 94-95) が述べているように、語彙には形態的・統語的情報が含まれており、時にはその区別が難しい。筆者は、形態素と以上のような要素をまとめて扱うのではなく切り離して研究すべきだと Weinreich は言いたいのであろうと考える。二つ目の区別は、義務度の異なる範疇の区別

である。これは、例えば、英語における時制は生物の性別より義務的であるし、また、語順について言えば英語の方がドイツ語より主語と動詞を含む語順パターンが義務的であるし、ロシア語は英語やドイツ語より語順が任意的であるというものである(Weinreich 1966: 29-30)。3つ目の区別は、カテゴリーを表す形態素の語順統語法的拘束の大きさや小ささの区別である。

Weinreich はこのような分析の土台を作る事によって、前述したような学者による見解が全く異なるといった問題を解決し、下手な先入観を持つことなく言語資料を検討することができるかと述べている。

## 第2章 形態素の文法的機能と転移の可能性

この章では、形態素のうち特に結束形態素の転移の可能性について考える。自由形態素が転移するのは理解しやすいが、結束形態素も転移している事実があり、そのメカニズムを探ろうというのである。Weinreich はこの結束形態素の転移の可能性をソース言語における文法的な機能と受容言語の抵抗との相関であると考えている。この章で何回も出てくる議論に、データの取り方がある。データは、当時、二言語併用者の流動している言語運用でなく、主に固定した言語の中にそれらを求めていた。それゆえ偏りが出たのであって、転移がほとんど抑制されない実際の言語運用を観察すれば、強度の拘束形態素についてですら面白い転移が多く見られることは疑いないだろうと Weinreich は述べている(1966: 33)。

形態素の転移に見られるものとして以下のような例がある。(以下の(1)から(3)の例は Weinreich (1966: 31-34)からのものである。)

- (1) 複数を表わす接尾辞や指小辞等。例：イディッシュ語の *pojerim* 'peasants(農夫)'、*doktojrim* 'doctors(医者)'に見られる複数形 *-im* (直接的ではないが究極的にヘブライ語の起源からのもの)、英語の *kitchenette*(簡易台所、小さい台所)に見られるような指小辞 *-ette* (フランス語からの直接的転移というよりは、*statue*(彫像) *-statuette*(小彫像)、*cigar*(葉巻) *-cigarette*(紙巻たばこ)といったペアに見られるような生産的な方法から入ったもの。
- (2) 拘束形態素の転移が似通っている構造を持つ言語間で促進されるケース。例としてルーマニア語とブルガリア語間、ロマンシュ語とシュヴァイツァトウチュ語におけるケースが紹介されている。ルーマニア語方言では、古い形の *-u*、*-i* に代わってブルガリア語の起源である *-um(-am)* と *is* が発生したという。ここでは、二つの条件が満たされている。つまり、一致した文法構造と相似した語彙である。Weinreich は「実際、形態素の転移が高度に一致している構造間で促進されるということはかなり理に適ったことである。なぜならば、高度に結束した形態素はかなり文法上の機能に対する依存度が高いので、それに対する機能が存在しない限り、適合しないシステムの中では無意味である。」(1966: 33) とまとめている。

彼のこの言は拘束形態素の転移は極めて少ないか、あるいは起こり得ないと主張する学者がいる中で貴重な意見としてオドリン (1995: 95)に評価されている。

- (3) 形態素がゼロまたは音韻的に小さな形に変わるというケース。例としてスイスにおけるイタ

リア語方言では複数形のゼロに *-en* が取って代わり、*-o* がルーマニア語の呼格であるゼロに取って代わり、*ge-*が受動分詞に、またイディッシュに影響された英語では女性形に *-ke* が取って代わったなど、他にも多数列挙されている。

なぜこのような現象が起こるのか。その理由を Weinreich は次のように分析している。「二言語併用者はひとつのシステムのカテゴリを別のもの以上に強く表現しなくてはならないと感じ、強化のために形態素を転移する。この表現の強化については形態素の転移は情緒的なカテゴリが関与しているところで自然に繁栄する。」と分析している。

転移が起こる可能性として Weinreich が焦点を当てているのが品詞である。品詞の中には転移しやすいものとしにくいものがあるのではないかという見方である。先ほども述べたように、Weinreich と同様、比較的拘束度が低ければ低いほど形態素は、別の言語の対に当たる語と入れ替えやすいと主張する学者は多い (オドリン1995: 94)。その例として、ウクライナ語もルーマニア語も形容詞の比較級を持っている。が、ウクライナ語では、比較級はストレスのない拘束接尾辞によって表わされる。ルーマニア語のシステムでは、比較級を作るには、切り離せるフォームの *mai* を形容詞の前に置く。形容詞そのものは何の影響も受けない。この接触下における二言語併用者はウクライナ語の比較級にルーマニア語の *mai* を使う事によって (これによって *more older* 「より年寄り」といった冗長的なものになる) 補強するという。

次に考えられる形態素転移の可能性は、単純な機能を持つ形態素のほうが複雑な文法的機能を持つ形態素より転移しやすい傾向があるという事である。例えば、特定の働きをする前置詞は自由に発生できる名詞に比べて転移されにくいし、接続詞によって支配されていたり、本動詞の法 (モード) を支配している助動詞は十分に発達した完全動詞に比べて転移されにくい反面、そのように一語文や間投詞などといった一体化していない形態素はほとんど自由自在に転移可能である (Weinreich 1966: 34-35)。ここで重要なのは構造である。二言語併用者が接触している他言語の格システムと同一と見なす事が出来る格を受容言語が持っていれば、前置詞の転移は促進される。

ここで Weinreich はある言語の形態素の品詞を次のようにまとめている。最も構造的で統語的に一体化した「屈折語尾」 > 前置詞や冠詞、助動詞といった「文法語」 > 名詞や動詞、形容詞といった「完全語」 > 独立した副詞と完全に一体化しない「間投詞」 というように、左に行くほど転移し難い順序に並べる事によって、形態素の一体化が十分になればなるほど、転移は起こりにくくなるという予測を立てた。しかし、これを立証するための検査方法には注意が必要である事が分かった。Haugen (Weinreich 1966: 36) がアメリカにおけるノルウェー人とアメリカにおけるスウェーデン人による英語の借用語のリストにおける品詞の比率を計算したこの研究では、75%であった名詞と比べ、他の構造的独立性から見れば名詞と同じくらい転移可能性があるはずの間投詞は、予想に反して、1.4%しかなかった。この結果から、借用語間の形態類の比率は受容言語及びソース言語の全語彙におけるこれらの形態類の比率を比較しなければ、本来見たかったものが見られない事になり、品詞を統計処理する難しさが明らかとなった。

なぜ、借用語の通常のリストの中で名詞がそれほど目立つのだろうか。その理由について

Weinreich (1966: 37) は次のような主旨を述べている。名詞が目立つのは文法的かつ構造的性質というよりは語彙的・意味的性質のせいで、言語と文化の接触があるところでは、新しい指示が必要とされる項目が多くの場合名詞によって表わされたからである。例として、接触を経験しているヨーロッパ言語においては、多くの具体的な「もの(things)」が動詞、副詞、接続詞、前置詞等よりは名詞によって通常表わされる率が高いというのである。

一方、転移を阻止する要因もある。印欧言語やセム語系の言語であるヘブライ語、アラブ語、ユダヤ語等などでは屈折した動詞のシステムは新しい語幹が外からの転移に対して抵抗となるという (Weinreich 1966: 36-37)。ヘブライ語のような言語では、語幹の4つの子音までで、5つ以上の子音を持つ動詞は扱えないが、他の言語では、語幹は屈折するが、長さ制限があるのでそれに応じた方策を使って対応するという。例えば、動詞の場合、ドイツ語では *-ieren* を新しい語幹につけ、ロシア語では *-irovat*、現代ギリシャ語では *-adzi* をつけるという。この他、動詞を活用させるだけでなく、迂言的方法に訴えることも出来る例も紹介している (Weinreich 1966: 37)。また、「いくつかの格があるうち1つを示す前置詞」などは自由に発生できる名詞に比べ転移しにくいといった品詞の性質も転移を阻止する一要因となる。

形態素の転移に関して、オドリンは語彙と意味の領域を中心として、いくつか大切な示唆を示している。言語習得過程における普遍性も考慮に入れるべきだということである。子どもの語彙能力テストから得られた結果においては、第二言語話者のものも母語話者のものもかなりの程度まで、意味的直感に相似性があり、そこからは意味情報の普遍的な格があるのではないかと推断されるし、一般の学習者については過剰拡大や近似化という方策を採る傾向がみられ、この方策は他の意味的新形式の習得と共に第一言語の習得にも見出される。ゆえに、語彙の分野で見られる誤りのうちいくつかは、すべての言語習得状況の中で作用する過程の普遍性を示す最善の証拠であるということである (オドリン1995: 92-93)。更に、彼は続けて語彙転移の事例にも触れ、特に同族形式の場合、形態的・意味的の両者の転移であると述べている (オドリン1995: 94-96)。

いずれにしても、オドリンはこの分野の研究の発展のためには、認知に関する通言語的研究、および第一・第二言語習得における語の意味の発達に関する研究、普遍性の研究、意味論、統語論の研究、そして何よりそれらの相互作用においても意味の問題がより解明されない限り大きな進歩がありえないと述べて、この分野に対する意味の研究の重要性を説いている (オドリン1995: 94-96)。

### 第3章 文法関係における転移

文法的領域で見られる転移について、Weinreich (1966: 37-39) は下のようなタイプに分けている。

(1) 別の言語の文法関係を複写することによって本来意図する意味と違う意味を伝えてしまう。

例えば、ドイツ人が英語を話すときに、ドイツ語の *diese Frau liebt der Mann* 'The man loves this woman.' を言おうとして、'This woman loves the man.' と逆のことを言ってしまう。

(2) 別の言語の文法関係を複写することによって既存の文法パターンを壊してしまい、無意味な文を生み出すか、または含意によってかろうじて理解可能な文を生み出す。例えば、ドイツ人

が英語を話すときに、ドイツ語の *gestern kam er* 'he came yesterday.' を言おうとして、  
 '\*yesterday came he' という非文を言ってしまう。

- (3) ここで示されるものは理論的なものであって実際の例ではないが、同じ領域に義務的な文法関係が存在しない言語に別の言語の文法関係を不必要に付加する。例えば、もし英語話者が英語の文法、主語+動詞+目的語をロシア語の言語運用で用いようとする、過度に単調になるもののロシア語の文法には違反しない。

これらのタイプすべてが文法関係のすべてのタイプ(語順、抑揚、一致と従属)に影響を与える。

- (a) 語順 例えば、スイスの二言語併用の子供たちはロマンシュ語を話すとき、シュヴァイツァトウチュ語のパタンである冠詞+形容詞+名詞をモデルとして本来の語順を変えてしまう等、語順における転移の例は多いという。
- (b) 抑揚 抑揚を他の言語のものを使ってしまうことによって、違う意図を伝えてしまったり、第二言語の影響でストレスの位置を間違えるケースがある。例を示して見ていこう。
- ① A 言語の抑揚パタンを B 言語に用いる事によって本来意図しなかった内容を伝えてしまう。

例： イディッシュ語における *du vilst smetene* 「あなたはサワークリームが欲しいですか」の抑揚と含意の例

- <1> 否定を期待した yes-or-no question のイントネーションパタン：  
 上から3-2-1で落ちるイントネーション「あなたはサワークリームがほしい」
- <2> 通常の yes-or-no question：  
 1-2-3で上がるイントネーション「あなたはサワークリームがほしいですか」
- <3> 別の疑問文：  
 2-3- ↓ のイントネーション「あなたはサワークリームがほしくはないですね。」

上の抑揚ルールを他の言語の文に応用して「あなたはうちに帰るところではないですね。」というつもりで、「あなたはうちに帰るところです。(2-3- ↓)」と言ってしまう。

- ② イディッシュ語の複合名詞は最初の要素にかなり強いストレスを必要とするのがルールであるが英語の影響でストレスの位置をずらしてしまう。

例：

本来のイディッシュ語： /'arbeter-'ring/ (労働者のサークル)

/'perets-,mitlsul/ (ペレッツ中学)

英語の影響を受けたイディッシュ語： /,arbeter-,ring/

/'perets-'mitlsul/

(c) 一致と従属 このタイプの文法関係における転移は容易に観察される。つまり別の言語をモデルとするために、性の一致が必要なところで無視してしまったり、適切な格を選び損ねたりする現象のことである。

以上のような文法関係の逸脱の例は転移のとても一般的な例で枚挙に遑がない。また、言語転移が影響するものに、ある言語では形態素によって示される機能で他の言語では文法関係によって示される機能がある。例えば、ドイツ語の形態素 *dieser* の機能は *die* とは区別され、イディッシュ語ではストレスによってあらわされる。この相違によって、ドイツ語-イディッシュ語の二言語併用者はドイツ語の形態素を転移させるか、イディッシュ語の強調パターンを形態素によって使用することになるという (Weinreich 1966: 39)。

最近の研究では語順の逸脱がなぜ起こるかについて様々な見解がある。母語の影響による転移であるというものと、転移とは関係がないというものである。その中で Givon は第二言語学習の際の理解や表出の際に語順において経験する困難は母語の影響とはほとんど関係しない、むしろそれらは談話の普遍性から来る制約によるものだという見方をしている (オドリ 1995: 102-105)。Givon による話し手の判断を反映する話題の順序は次のようなものである。

最も継続的な話題 > 照応語不在 > 無強勢の代名詞 > 右方転移 > 中立的順序 > 左方転移 > もっとも非継続的な話題

上記の順序が言語の統語的特質に限らず、通言語的な規則性を持つという事を考える時、単に転移というよりも話題継続性の普遍的原理を反映するものとして語順の逸脱が起こると考えると説明する事が妥当かもしれないとも考えられよう (オドリ 1995: 106)。

また、その一方で語順にみられる逸脱は生得的原理が働いていると考える普遍文法に基づく考え方もある (オドリ 1995: 107)。

オドリによれば、談話理論や普遍文法に対し、母語の影響による転移と見られる証拠も出されている。特に興味深いのが関係詞節に見られる枝分かれの方向の違いによる理解度の研究 (Flynn 1984; Flynn and Espinal 1985) と関係詞化の位置に関する通言語的研究 (Keenan 1985; Keenan and Comrie 1977) である (オドリ 1995: 112-119)。前者は ESL (第二言語としての英語教育) での学生を使った理解度の研究であるが、母語が左分かれ (日本語・中国語など) の学生は母語が右分かれ (英語・スペイン語など) の学生より英語の関係節を反復するのに困難を感じたという。また、後者の通言語的研究では関係詞化が可能な位置の間に含意的な関係があり、それは次のようなものである。

主語 > 直接目的語 > 間接目的語 > 前置詞の目的語 > 属格 > 比較の目的語

これが意味するところは、もし、ある言語において前置詞の目的語が関係詞化が可能な位置であるならば、直接目的語も間接目的語も主語も関係詞化できる位置である。しかし、逆は必ずしも真ではないという意味である。たとえばタガログ語は主語のみしか関係詞化を許さないが英語は6つの

全てを許す。そこで、The musician who played at the concert is from China をタガログ語にするのは容易でも、The musician whom we met at the concert is from China をタガログ語にするには回りくどい訳をしなければいけなくなるというのである（オドリン1995: 116）。

通言語的な言語普遍性の研究と言語習得論の研究が今後の発展に大きな鍵を握っているようである。

#### 第4章 同価形態素に対する複写機能

Weinreich が言う「複写機能」とは、二言語併用者がA言語の形態素または文法範疇について、B言語と同一とみなすものがあつた場合、その人はA言語から出来ている文法機能の中にB言語の形態を適用する事を言っている。この適用が起こる要因は「形態上の類似性」又は「既存の諸機能における類似性」であると Weinreich は分析している（Weinreich 1966: 40）。

形態上の類似性と比べ、機能上の類似性が同一視を誘う事もある。ウズベク語話者がロシア語の構造 *iz+* 属格を母語の部分格と同等と見なし、慣用的なロシア語が他の前置詞 (*ot*, *u*, etc.) を要求するところで *iz+* 属格を使用してしまうという (Weinreich 1966: 39-40)。Weinreich によれば、これらは語彙領域における借用翻訳と同じ過程を経ると述べ、様々な例を示している。多くの例のうち一つを挙げよう。ハンガリー語では、*akár* 'or' という接続詞がスラヴ語の同意語 (例: セルボクロアチア語の *volja*) と同一視された結果、それをもとに、一つの拡張された構造である *akár...akár* 'either ... or' (セルボクロアチア語では *volja...volja*) が作られたという。

言語社会の形態素の機能を体系的に拡張することにより、形態用法を変えるだけでなく、別の言語を手本にして義務的カテゴリーの全構造を新しく作るという事実も Weinreich は紹介し、そこに二言語併用者の言語運用が言語社会にヒントを与えていると指摘している (Weinreich 1966: 41)。

重要なことは、二つの文法様式が転移を起こす時、より明示的な様式が模倣するモデルとして機能しやすいという事である。このことは、新しいカテゴリーの創造においてだけでなく、既存の文法機能を満たすために新しい派生接辞が発達するような言語接触による変化においても当てはまる。

言語接触に多くさらされるヨーロッパ言語の多くは、副詞節の全組織が別の言語から再生産されているという。例えば、イディッシュ語ではゲルマン語起源の *far*, *tse-*, *on*, *der-* といった副詞的補語がポーランド語の *za-*, *roz-*, *na-*, *do-* とそれぞれ似た相的機能をもっている。他にロマンス語の副詞節はドイツ語から、ハンガリー語はある程度ドイツ語から、イディッシュ語はスラヴ語からといった具合である (Weinreich 1966: 40)。部分的に相似があると、同一視が文法カテゴリー全体について起こることもある。例えば、アメリカにおけるドイツ語話者はドイツ語の現在時制を英語のものと同じ視して *How long have you been here?* というべきところ \**How long are you here?* といってしまうのがその例である (Weinreich 1966: 40)。

#### 第5章 義務的弁別の放棄

ここでは、結果として文法的範疇の消失になる文法的転移のタイプについて触れる。英語話者が

外国語を学ぶ時、その外国語の格、性、相を見分けそびれることがある。自然な言語接触状況でも同じように他言語の影響で本来義務的であったものが一貫してあらわされなくなっているのはその延長線上にある。例えば、テキサス州のドイツ語話者は英語の影響である構造において、与格と対格の区別を無視するという。このようになり義務的で目立つ範疇だけでなく、より任意性の高いものも消える可能性もある。また傾向として言語全体に影響が現れている例（アイルランドでは無意識な会話ではアイルランド語の中でも英語の構造に似ているものを選ぶ傾向がある）もある。アイルランド語における英語の影響は細部だけでなく全体的な結果はかなりなもので、英語と同時に話されているところではアイルランド語の平凡化がかなり進んでいるという（Weinreich 1966: 43-43）。

## 第6章 構造外の要因の役割

Weinreich (1966: 43-44) は、すべての型の個々の形態素の転移が起こる格好な構造条件というものがあると述べている。例えば、既に存在しているものの型に類似性があるとか、形態素が比較的非拘束的であったりする場合である。しかも、場合によっては義務的範疇が任意的になったり放棄されたりする事もある。

上記のような転移を促進するような構造的・非構造的状況における要因が揃ったからと言って、文法転移につながるわけではない。逆に、転移に対する複雑な抵抗もそこには存在する。例えば、純粋に構造的な要素として考えられるのが既存の形式と新しい形式が共存できない場合、また、心理的理由としては、転移した用法を採用することに対する非積極的な態度、そして社会-文化的要因として、転移された形式を使う事によって受ける社会での有利さ(不利さ)、などが複雑に絡み合っている。

いずれにせよ、これらを解明するためにはデータをまず何よりも入手しなくてはならない。しかし、言語学的事実の複雑さを判断するための分析データは、言語接触の自然な場面における二言語併用者の流動している言語運用からでなくてはならないというのが Weinreich の主張である。しかし、前にも述べられているように、データが流動的なだけに分析と信憑性の判断が難しい。

## 第7章 転移した語の文法的統合

ある言語から別の言語に転移した単語も、受容言語の音声面や文法面で影響を受けやすい。その最たる例は借用語の文法的適用（例えば「性」の適用）である。Weinreich (1966: 44-46) は性を受け例を次のようにあげている。例えば、生物なら、アメリカにおけるポルトガル語の *a norsa* (<nurse)、アメリカにおけるイディッシュ語の *di no (j)s* は女性だし、*o boquipa* (<bookkeeper) と *der bukker* はどちらも男性である。無生物名詞では、語形式で性が決まる事もある。例えば、アメリカにおけるポルトガル語では *cracker* が *-a* という語尾があるので *craca* という女性となっている。アメリカのイディッシュ語では、*kreker* の語尾から男性名詞として分類している。名詞の中には、本来の性をそれらに取って代わった借用語へと伝えるものもあるし、別のケースでは、分類の基本（基礎となっているもの）は受容語における性のうちどちらかのより造語力が大きいほうに



なるものもあれば、分類が説明されないままになっているものもある。

以上のように、転移された語が受容文法に統合されたものもあれば、文全体が未分析の形式のまま転移される事もある。例えば、アメリカにおけるイタリア語の *azzoraiti* 'that's all right' や *variuvanni* 'what do you want', *goraelli* 'go to the hell.' などである。

また別の状況では、転移した語に対するソース言語の形態素を維持する場合もある。例えば、英語型の複数形 *minimums*、*focuses*、*formulas* の代わりにラテン型の複数形 *minim-a*、*foc-i*、*formula-e* であるが、これについては教養を示したいと言う欲望や格式の高さそのものを維持したいという意向が底流に流れている。つまり、文化的要因がここに表わされているといえよう。

このように、転移した語を取り入れるか入れないかという選択も話者によってなされている。この選択は接触している言語の構造によるのではなく、接触状況におかれた個人の心理的、社会文化的要因によるものようである。分析する際には別になされるべきものであろう。

## 結章

本論文では、いわゆる統語及び形態論に関わる分野における言語転移の現象がどのような場面で、どのように見られ、その理由は何なのかを Uriel Weinreich による *Languages in Contact* (1966) を中心に見てきた。

文法の分野と言っても、構造的に見ただけでも、語彙・形態・談話・意味・統語(語順)等の諸分野に関わる事が明らかになり、それらが複雑に絡み合う中でも、一定の線引きをする事によって焦点を絞った研究が必要とされる。また、これに加え、最近の研究では、二言語話者の持つ接触言語がどのような構造的特徴と非構造的特徴を持つのかを検討し、なおかつそこに言語普遍性や言語習得理論を取り入れねば、本当の意味での転移の全体像やメカニズムを探る事はできないことが明らかになっている。今後、様々な分野での研究成果を包括的にみる事が転移研究には必要不可欠であろう。

## [謝辞]

本論文を作成するにあたりご助言・ご指導くださった金沢大学の岡崎文明教授に感謝を申し上げたい。

## [参考文献]

- GASS, Susan. *Language transfer in language learning*. Newbury House Publishers, Inc. 1983.
- ODLIN, Terrence. *Language transfer*. Cambridge University Press. 1989. (オドリン、T. 『言語転移』丹下省吾訳、1995)
- WEINREICH, Uriel. *Languages in contact*. Mouton & Co. 1966. (ワインライヒ、U. 『言語間の接触—その事態と問題点—』岩波書店、神鳥武彦訳、1976)
- 亀井孝、河野六郎、千野栄一編著『言語学大辞典』三省堂、1996